HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中世の知と文芸［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	髙尾, 祐太
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13839号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78694
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuta_Takao_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：髙　尾　祐　太

学位論文題名

中　世　の　知　と　文　芸

・本論文の観点と方法

古典文学史上の規範となる多くの作品が成立した古代、それらに対する実証的な研究・評価が進展した近世にくらべ、様々な領域で秘儀や口伝の重視された中世は、文芸の分野においても、これまで牽強付会や荒唐無稽な言説の流通した時代として一段低く位置づけられることが多かった。しかし、近年、寺院の聖教をはじめとし、そうした中世的知の基礎となった資料の公開が進み、現代の眼には荒唐無稽に見える中世の作品が持つ特有の論理や思想が徐々に明らかになりつつある。

本論文もまた、こうした最新の研究動向と連動する。中世の文芸を対象としつつもそれのみにとどまらず、それらの基盤となった仏教・神道その他多岐に亘る領域の文献・資料を博捜し、文芸作品との関連性をひとつひとつ緻密に分析・実証してゆくことで、一見不可解にも思える言説を支えていた思想と論理を浮き彫りにする。同時に、歌論・説話・軍記等、異なるジャンルの作品をとりあげ、それらの背後に共通して存在する思考を示しだすことで、中世の文芸を生みだした大きな知の枠組みを明らかにしようとしたものである。

・本論文の内容

第一部「古今伝授と中世の知」には、古今伝授に関する論考を収める。

第一章「「三鳥」の秘説と中世の注釈の思想世界」は、古今伝授の秘説として著名な三鳥の切紙と、切紙に附随する口伝（それも切紙として伝わる）の読解を行った。古今伝授に於ける『古今和歌集』講釈の講義録（聞書）である『両度聞書』の仮名序注と、三鳥の秘説に関する口伝「鳥之口伝」の両方に見える「元初の一念」の語は、日本天台で発明された語であるにも拘わらず、本来の日本天台に於ける意味から逸脱するものであった。このような天台本覚論的な意味に留まらない「元初の一念」の用例は、浄土宗第七祖了誉聖冏『麗気記私鈔』や一条兼良『日本書紀纂疏』にも見られる。この「元初の一念」の意味の変成と流通に寄与した知的基盤の闡明を試みた。本章は中世の知的基盤を洗い出すことにより今後の論の指針を示すもので、本論の序論に相当する。

第二章「古今伝授と中世の神道実践」では、東家流の切紙「稽古方之事」の六通目「中」の「一句之文」の検討を通して、古今伝授に中世の神道実践の影響が見られることを確認した。古今伝授には、東常縁が堯孝から伝受したとする常光院流と、藤原為家から東家の素暹に伝授され、東家に代々伝わったと標榜する東家流がある。その東家流の切紙に見える「一句之文」は、賢圓（未詳）なる僧から常縁が伝授された、中臣祓の伝授『大中臣祓』の清浄偈に基づくものであった。『大中臣祓』の清浄偈に、中臣祓の実践という場に於いて、どのような意義付けが為されていたかを検討し、古今伝授の「一句之文」が古今伝授の思想体系の中で与えられた意義を把握することを試みた。

第三章「正直の歌学」では、古今伝授の鍵概念「正直」の内実を考察した。『両度聞書』冒頭において、『古今和歌集』の題号「古今」二字は「古」と「今」に分解され、それぞれ「正直」の「正」

と「直」に配当される。その上で、「正」を媒介に「自性の心」と「天照太神の御心」が接続されている。この「天照太神の御心」との一体化を志向する「正直」とは別に、古今伝授には、和歌を極端に作為性を排して素直に読む意味の「正直」がある。一見異なる二つの「正直」の関係を探ることで、古今伝授の思想体系を浮かび上がらせることを試みた。

以上三章を通じて、第一部では、古今伝授を例に、「荒唐無稽」と言われた中世の言説にも、中世の知的空間の中に据えることで顕在化する中世なりの論理があること、更にそうした論理の網目の基底には、『大乗起信論』にもとづく、〈一心〉からの世界生成説という、中世に分野を越えて共有された知的基盤があったことを確認する。

第二部「中世の言語観と文芸」では、心敬（一四〇六〜一四七五）の連歌論を取り上げ、その基盤にある思想を追究した。

第一章「無住に於ける説話の言語」では、心敬の連歌論の主著『ささめごと』に影響を与えた無住の『沙石集』、とくにそこに開陳される和歌陀羅尼説（和歌と密教の陀羅尼を等同ないし同一と看做す説）の分析を通じ、心敬に影響を与えた無住の言語観を考察した。無住の著作には『声字実相義』をはじめとする空海の著作がしばしば引用されるが、無住においては本来の文脈での意味を離れて用いられていた。そこで、無住と空海の密教的言語観を比較することで、無住の言語観の特徴を定位することを試みた。無住は臨済宗の僧と言われることもあるが、その宗派的立場ははっきりしていない。無住の思想は諸宗兼学的であり、諸宗を一つの体系に位置付ける思考に於いて、非言語的な真理の世界を設定し、その真理が覆い隠されることによって生じる差異が言語であるとする言語観が、重要な役割を担っていることを明らかにした。

第二章「心敬『ささめごと』の連歌論」では、前章の無住の言語観の分析を踏まえ、心敬の連歌論の主著『ささめごと』を読解し、心敬の連歌論の基盤にある思想を掘り起こすことを試みた。『ささめごと』の上下巻にはそれぞれ跋文に相当する文があり、そこには言語で語られたものを脱却する志向から、『ささめごと』それ自体をも「跡なし事」と看做し、言語を越えた本来的な境地を目指すべきことが説かれていた。その根底にあるのは心敬が無住から受け継いだ言語観であった。

以上、第一部・第二部を通じ、中世後期の歌学を牽引した二条派・冷泉派の二大流のうち、二条派に伝えられた古今伝授と、冷泉派歌学の流れを汲む心敬の連歌論が、それぞれに基づいた思想体系を浮き彫りにし、両者の内に『大乗起信論』的世界観という基盤が共有されていることを示した。

付論「『平家物語』「剣巻」の密教的転換」では、『平家物語』の一部の写本に付属して伝えられる「剣巻」の読解を通して、第一部・第二部の考察を通して見て来た中世の知的基盤が、和歌の世界に留まるものではなく、広く中世に共有され、新たな創作の源泉となっていた可能性を考察した。『平家物語』の要所、壇浦の戦いに於いて、三種の神器の宝剣と共に西海に沈んだ安徳天皇の正体を、『平家物語』諸本が八岐大蛇とし、かつて素戔嗚尊に奪われた宝剣を安徳天皇として現れた八岐大蛇が奪い返し龍宮に持ち帰った、と解釈することで、皇位の継承の正統性を保証する三種の神器の宝剣の喪失と言う王権の危機的事態を、末世に不可避の事態として納得することはよく知られている。しかし、「剣巻」の諸本全てが、『平家物語』本文とは異なり、安徳天皇（＝八岐大蛇）の正体を「風水龍王」とすることは従来注目されてこなかった。この「風水龍王」とは、『大乗起信論』の注釈書である『釈摩訶衍論』に登場する、一心の生滅門（一心が無明煩悩に覆われることで幻としての世界を発生させる状態）を比喩的に表現する存在であった。この点を梃子にして導かれる「剣巻」の新たな読みを提示した。

また、附録として、付論に用いた資料である三千院円融蔵『三種神器大事』の翻刻を収録した。